

芥川龍之介作品における女性表象 (並びに彼の恋愛・結婚観の一面)

日本語日本文学科 五島 慶一

初めに

本稿の目的は、まず芥川龍之介作品を概観し、そこに見られる女性表象のあり方を分類的に纏めてみることにする。そしてその結果と、芥川自身の発想がより直接的に認められると思われる、随想や感想の類での言及も適宜参照し、芥川の女性認識(含、恋愛・結婚を巡る意識)の一端を探ることにある。なお著者は必ずしもジェンダーやセクシュアリティの問題について、専らに研究している者ではない。現在の研究の最も中心にあるのは芥川龍之介作品の語りを中心とした構造分析、それを通じて、芥川がどのように現実を把握し、それを虚構化しているか、という問題である。よって、ジェンダー問題を論ずる際の方法論などについて、あるいは前提として欠ける部分があるかもしれないが、そうした点は御寛恕・御教示いただければ幸甚である。

一 芥川作品における女性表象(類型的仮分類)

上記目的により、芥川作品から女性が登場・描き出されているところから考えたものを抽出し、以下の九つのタイプもしくはカテゴリー(範疇)に分類してみた。当然ながら当該作品すべてを網羅できたとは言えず、まだまだ女性を形象化した重要作が芥川作品のなかにあることは既に承知しているが、今回は整理のついた範囲で示したいと思う。

① 無智で一途な(思いを抱く)少女(→聖女?)

「偷盗」(『中央公論』大正六〔一九一七〕年四・七月)の阿濃

「南京の基督」(『中央公論』大正九〔一九二〇〕年七月)の金花

「舞踏会」(『新潮』大正九(一九二〇)年一月)の明子 ⇒後の「H老夫人」

② 烈女 ※類型としては時に①とも重なり、また③に流れる

「藪の中」(『新潮』大正十一〔一九二二〕年一月)の導入部での真砂
「おぎん」(『中央公論』大正十一〔一九二二〕年九月)のおぎん
「おしの」(『中央公論』大正十二〔一九二三〕年四月)のおしの

③ 貞婦

「手巾」(『中央公論』大正五〔一九一六〕年十月)の西山夫人
「藪の中」(前掲)「清水寺に来れる女の懺悔」より
「おぎん」(前掲)のおすみ

④ 老女①——昔日を語る者

「舞踏会」(前掲)のH老夫人
「雛」(『中央公論』大正十二〔一九二三〕年三月)

⑤ 老女②——醜き者

「羅生門」(『帝国文学』大正四〔一九一五〕年十一月)の「老婆」
「偷盗」(前掲)の「猪熊^{みのかま}のお婆」
「妖婆」(『中央公論』大正八〔一九一九〕年九・十月)のお島

⑤-2 嘗ての美しかりし者

「偷盗」(前掲)の「猪熊のお婆」
「二人小町」(『サンデー毎日』大正十二〔一九二三〕年三月二十日)

⑥ 母(なるもの)①——エゴ(自己と子どもとの閉じた・完結した関係)

「女」(『解放』大正九〔一九二〇〕年五月)
「あばばば」(『中央公論』大正十二〔一九二三〕年十二月)
「母」(『中央公論』大正十〔一九二一〕年九月)

⑦ 母②——子どもに示す絶対的な愛 ※ ⑥のあり方と表裏

「杜子春」(『赤い鳥』大正九〔一九二〇〕年七月)の母

⑧ 妖婦(ファム・ファタル)

「藪の中」(前掲) 「巫女の口を借りたる死霊の物語」

「おぎん」(前掲) のおぎんが見せる一側面

「儉儉」(前掲) の沙金

「素盞鳴尊」(『大阪毎日新聞』夕刊・『東京日日新聞』大正九〔一九二〇〕年三月三十日～六月六日〔後者は七日〕) の大気都姫おほけつひめ(烈女から娼婦へ)

「カルメン」「サロメ」などへの興味(芥川による言及や、同タイトルでの創作〔の試み〕が複数認められる)

⑨ 謎——男にとっては永遠に理解できないものとして ※⑧と関連

「尾生の信」(『中央文学』大正九〔一九二〇〕年一月)

「路上」(『大阪毎日新聞』大正八〔一九一九〕年六月三十日～八月八日)

二 芥川作品における女性表象(分析)

次にそのように類型化・分類したものをどう分析するか。ここでは紙幅の都合もあり、それに対して更に大づかみに数点に絞って要点を抽出することとしたい。

1 その美しさへ魅かれる気持ち 他方、そうした対象の〈美〉が持続しない、短命で儂いものであるとの認識

芥川には、現実のそれを含めて、女性を〈美なるもの〉、更に言えばそのアイデアとして捉えようとする態度が強く見られる(余談ながら、彼は艶聞の多い作家として知られている。現実における女性への「惚れやすさ」もこれに関連するだろう)。言うまでもなくそれは彼の願望であり、小説という架空・仮想そして(自らの意のままになるという意味では)理想〈世界〉において、その純粹性を称揚・保持したいという願望を示すかのようである。先の分類①群がその典型であり、他に⑥中「あばばば」の前半分——母になる前のたばこ(雑貨)屋のおかみさんに対する、次のような主人公・保吉の観察もそこに当て嵌る。(芥川作品・文章からの引用は『芥川龍之介全集』〔岩波書店 一九九五～一九九八〕に拠り、ルビは適宜省略した。傍線・傍点はすべて引用者、以下同)

女は赤い顔をした。この瞬間の感情の変化は正真正銘に娘じみてゐる。それも

当世のお嬢さんではない。五六年来迹を絶つた硯友社趣味の娘である。保吉はばら銭を探りながら、「たけくらべ」、乙鳥口つばめぐちの風呂敷包み、燕子花かきつばた、両国、鎗木清方、——その外いろいろのものを思ひ出した。

一方で、女性性を美として見出す視線は、それが反転すると、老いてかつての容色を喪った女性に対する時の酷薄な態度へと繋がる。芥川には（男性も含めて）老いたもの、とりわけ老女を殊更に醜いもの、忌避される／すべきものとして描く傾向、そうした一連の作品群が認められる。即ち分類⑤がそれにあたる（余りに有名であるゆえ引用はしないが、「羅生門」の老婆などはその典型である）。

2 男性を狂わせるものとして、畏怖・忌避の対象

女性の美は、それに魅かれて他を忘れさせること——結果として彼の喪うものの大きさから、男性にとって恐怖の対象ともなりうる（言うまでもなく、そうした発想自体が男性側の身勝手なものだが）。当然、その発想の延長線上に出てくるのが、男を喰いものにする美貌の女性という、分類⑤-2の「二人小町」や⑧の諸作に出てくる女性たちである。これは恐らく芥川の現実生活にも当て嵌るあり方であり、彼は美しい女性に魅かれながら、同時に、もしくは後になってからそれを恐れ忌避した様が、例えば「歯車」（「一 レエン・コウト」の章のみが生前に「歯車」の題で『大調和』昭和二〔一九二七〕年六月号に発表される。第二章以後を含む全体としては遺稿）「或阿呆の一生」（遺稿）などの晩年の作には窺える。

例えば夏目漱石作品において、同様の女性恐怖・忌避・嫌悪はしばしば登場人物男性たちをしてホモ・ソーシャルな人間関係に向かわせる。これは同時代状況を反映した、典型的な近代文学表象の型であるが、芥川の場合、現実の女性への恐怖から逃れる先として自由な裁量の利く領域である創作世界を準備していた面もあるのではないかとも思われる。したがってその表現においては、現実反映的に、女性恐怖・忌避を（登場人物が、もしくは全体の主題として）強く示す作品と、あくまで仮想世界の物事として、そうした女性への憧憬を示す作品とが混在しており、それら双方を合わせた延長線上に⑨があるのではないだろうか。

3 母親になった女性——自身の理解・認識の及ばないものに対する恐怖

とは言えそんな創作（架空世界）の領域にあっても、決して肯定的に描かれるこ

とのない女性の形態が、(前述した) 老い = 老女と、もう一つ「母」というあり方ではないだろうか。芥川の描く「母」たちの大半は、自らの子どもに対して絶対的な愛を注ぐ一方、あるいはそれゆえに、他に対して排他的な姿を示す。母性が本質的にエゴを含む、もしくはそれがエゴそのものである、という把握がそこにはある。

その根柢にある要因を考えるに、それは芥川の未知・不可解なものに対する本能的とも言える恐怖ではないだろうか。人は一般に自らの理解不能なものに対して恐怖感を抱くが、自己の認識・理解力に人一倍の自信を持っていた芥川の場合、知的に把握できないものへの恐怖はことさらに強かったかと推察される(彼の自殺理由〔とされるものの一つ〕が「僕の将来に対するぼんやりした不安」〔遺稿「或旧友へ送る手記」〕であることは余りに有名である)。母性は女性の持つ・示す様々な属性の中でも最も彼に理解・認識の及ばないものであり、そうした不可知のものに対する恐怖が⑥のような作品群を生んだと推察する。

三 芥川の恋愛・結婚観

ここまで芥川による女性表象を軸に述べてきたが、シンポジウムのテーマは「ジェンダーと女性表象」ということで、当日は芥川の恋愛・結婚観の一端についても言及した。その際は、短い発表時間の中で、また必ずしも日本近代文学に通じているわけではない聴衆へのアピールも考えて、松田奈緒子による芥川の伝記漫画『えへん、龍之介。』(講談社 二〇一一・六 ※余談だが本作は作家による脚色が入っているとは言え、基本的な出来事や同時代状況・背景などについては恐らく相当な資料調査に基づいており、我々専門家の眼から見ても十分納得の考証をなし得ている。しかも漫画として飽きさせずに読ませる展開・構成を持っており、お勧めの一冊である)を援用して、(やや強引に)流れとして纏めたのだが、改めてその折の資料を見返してみると、論として提示するにはやはり未だ資料・考察共に不足であるのを感じる。とはいえ、それらを付け加えて論じるには与えられた紙数では到底間に合わないため、今回は当日配布資料に掲げた芥川自らの言説の中から、彼の結婚・恋愛観を示す文章を二三抽出し、それらへの評言から本稿を(当面の)結論へと導くこととしたい。

初めに芥川が、当時婚約中だった塚本文に、大正六〔一九一七〕年五月三十一日附で出した書翰から引用する。

〔前欠〕ボクは毎日忙しい思をしてみます
今日鶴沼の和辻（哲郎／引用注）さんのうちへ行つたら松林の中にうちがあつて そのうちの東側に書齋があつて そこにモナ・リサの大きな額をかけて、その額の下で和辻さんが勉強してみました 芸者のやうな奥さんと可愛い女の子が一人ゐて みんな大へん愉快らしく見えます ボクは何だかその静な家庭が羨しくなりました（芸者のやうな奥さんはちつとも羨しくはありません）
ああやつて落着くべき家庭があつたら ボクも勉強が出来るだらうと思つたのです とにかく下宿生活と云ふものはあんまり面白いものぢやありません
文学なんぞわからなくつたつて いいのです ストリントベルクと云ふ異人も「女は針仕事をしてゐる時と子供の守りをしてゐる時とが一番美しい」と云つてみます ボクもさう思ひます
手紙もかざつてなど書かない方がいいのです 思ふ事をすらすら（引用注／原文はここに繰り返し記号を使用）そのまま書く方がいいのです だからいつもの手紙で結構です少しもまづいともおかしいとも思ひません いつ迄もああ云ふすなほな手紙が書けるやうな心もちでお出でなさい（書翰①）

ここからは、芥川が結婚相手に求めるものが家庭的な女性性であることが見てとれる。同じ志向のより強い表れをやはり文宛の次の書翰に見出すことができよう。

少し見ないうちに又背が高くなりましたねさうして少し肥りましたねどんどん大きくおなりなさいやせたがりなんぞしてはいけません体はさう大きくなつても心もちはいつでも子供のやうでいらつしやい自然のままのやさしい心もちでいらつしやい世間の人のやうに小さく利巧になつてはいけません×××××のやうになつてはいけませんあれではいくら利巧でも駄目ですほんとうの生れたままの正直な所がないからはいけませんあれの持つてゐるのはひねくれたこましくくれた利巧ですあんなになつてはいけませんすなほなまつすぐな心を失はずに今のままでどんどんおそだちなさい
それはむづかしい事でも何でもありません何時までも今のままでいらつしやいと云ふ事です何時までも今のやうな心もちである事が人間として一番名誉な事だと云ふ事です私は今のままの文ちやんがすきなのです今のままの文ちやんな

ら誰にくらべてもまけないと思ふのです

えらい女——小説をかく女や画をかく女や芝居をかく女や婦人会の幹事になつてゐる女や——は大抵にせものですえらがつてゐる馬鹿ですあんなものにかぶられてはいけませんつくろはずかざらず天然自然のままに正直に生きてゆく人間が人間としては一番上等な人間ですどんな時でもつけやきばはいけません今のままの文ちやんは×××××を十人一しよにしたよりも立派なものです何時までもその通りでいらつしやいそれだけで沢山ですそれだけで誰よりもえらござんす少くとも私には誰も外にくらべものがありません（書翰②）

この書翰②の出された日は不明である。全集では大正五〔一九一六〕年のところに推定で分類されているが、恐らく婚約の決まった／それに向けての動きがあったその年か、あるいは先の書翰①と同じく翌大正六（一九一七）年中のものであろう。

もう一つ、芥川が（後の）婚約者に出した書翰から、大正五（一九一六）年八月二十五日附のものを引用する。

貰ひたい理由は たつた一つあるきりです。さうして その理由は僕は 文ちやんが好きだと云ふ事です。勿論昔から 好きでした。今でも 好きです。その外に何も理由は ありません。僕は 世間の人のやうに 結婚と云ふ事と いろいろな生活上の便宜と云ふ事とを一つにして考へる事の出来ない人間です。ですから これだけの理由で 兄さんに 文ちやんを頂けるなら頂きたいと云ひました。さうして それは頂くとも頂かないとも 文ちやんの考へ一つで きまらなければならないと云ひました。僕は 今でも 兄さんに話した時の通りな心もちでゐます。世間では 僕の考へ方を 何と笑つてもかまひません。世間の人間は いい加減な見合ひと いい加減な身もとしらべとで 造作なく 結婚してゐます。僕には それが出来ません。その出来ない点で 世間より 僕の方が 余程高等だとうぬぼれてゐます。（書翰③）

ここからは、同時代の「世間の人」とは異なり、恋愛の結果としての結婚、もしくはその両態の一致を唱える青年・芥川という姿が見えてくる。

後、彼は文と結婚、大正七〔一九一八〕年二月に式を挙げており、それから二人の間には三人の男子が生まれた（大正九〔一九二〇〕年四月十日、長男・比呂志。

同十一〔一九二二〕年十一月八日、次男・多加志。同十四〔一九二五〕年七月十二日、三男・也寸志誕生)。その過程にあって、芥川がどのような精神的推移を辿ったのかは詳らかにしないが、とにかく彼の認識が先の書翰③時のそれからは大きく転換した(もしくは、そこで文に示した感情が一時的なものに過ぎなかった、という可能性もある)ことは確かである。芥川が大正十三(一九二四)年五月号『家庭雑誌』〔恋愛結婚号〕に発表した「恋愛と夫婦愛とを混同しては不可ぬ」という評論(「媒酌結婚と自由結婚との得失」の総題下、豊島与志雄「両方の長所を採るが良好の結果を生む」と共に掲載)では、大きく・乱暴に言って「恋愛」という概念そのものへの幻滅(その非永続性を主張)と、一方で強く〈現実〉的なものとしての「結婚」認識が示されている。その一部を引用する。

媒酌結婚で結構です

媒酌結婚と自由結婚との得失といふことは、結局、この二種の結婚様式が結婚後の生活の上に、如何なる幸福を導き出し、如何なる不幸を齎すかといふことのやうに解せられる。併し結婚生活の幸福とは果して如何なることを意味するであらうか、それも考へなければならぬ。太く短く楽しむのか、細く長く楽しむのか、それとも又た夫婦間に衝突のある生活なのか、俄かに決定することの出来ない問題である。又た恋愛といふもの、昔の人達の考へたやうな清浄高潔な恋愛といふものが、世の中にあるだらうか否かといふことについても、私は疑ひを懐いてゐるものである。

実際に於て、さういふ生活があり得るか否かは別問題として、一般の人たちが考へるやうに、太く長く且つ平和に楽しめる夫婦生活といふものを、理想とし幸福として考へるならば、聡明な男女には自由結婚が適して居り、聡明でない男女には媒酌結婚が適してゐると私は言ひたい。併し聡明といふことと、青年といふことは、多くの場合一致しないものである。だから大抵の場合、媒酌結婚で結構だと思ふ。

ホリデイ・ラブ

右は大体について言うたのであるが、無知な大人が媒酌する結婚は、聡明でない青年男女が自由結婚をするのよりも遥かに危険である。ここに無知といふのは、理解といふ言葉の意味を広義に解釈したときの無理解といふことである。

即ち現在二人が如何なる人生観を有つてゐるか、それが将来如何に変化してゆくだらうかといふ点まで考へないことである。結婚が人生の大きな時期^{エポック}を作るものであることは申すまでもない。結婚前の人物や思想といふものは、結婚によつて変ることが多く、結婚前の愛は結婚と同時になくなる、少くも変形するものである。

結婚後、湧いてくる新しい夫婦愛といふものは、人生の好伴侶として配偶者を見る愛であつて、結婚前の恋愛とは別箇のものである。私は愛の恒久性や純潔さを疑ふ。愛の変化消滅といふことについては厭世的である。恋愛の陶醉といふものが永続するとは考へられない。結婚して幻滅の悲哀を感ずるとは、よく聞くところであるが、結婚のみならず人生は総て幻滅の連続であらうと思ふ。結婚前の陶醉した恋愛とても、その過程^{プロセス}の中には幾多の幻滅があるし、結婚後の永い生活の間にも屢々幻滅を感ずる。幻滅のない恒久性の愛といふものは考へられない。この点から私はホリデイラヴ、即ち一週間に一度の恋愛を主張する。(後略)

恋愛を余り高調するな

今の若い人達は余り恋愛といふものを高調し過ぎる。恋愛に関して非常に感傷的^{センチメンタル}になつてゐると私には思はれる。婦人が殊に甚しいやうである。尤も男子のやうな社会的生活をすることが少いから、婦人に於ける性の意義は男子のそれよりも重く、それだけに婦人が当然の帰結として恋愛を高調するのも知れないが、実に馬鹿げたことである。恋愛といふものはそんなに高潔であり恒久永続するものではなくて、互に『変わるまいぞや』『変わるまい』と契つた仲でも、常に幾多の紆余曲折があり幻滅が伴ふものである。だから私は先に言うたやうにホリデーラヴを主張するのである。よしんば其の恋愛が途中の支障がなく、順調に芽を育まれて行つたにしても、結婚によつて、それは消滅し又は全く形を変へてしまふのである。

自由結婚にしても媒酌結婚にしても、結婚生活といふものは幻滅であつて、或る意味に於て凡ての結婚といふものは、決して幸福なものではないと思ふ。

とはいえ、芥川は結婚という制度もしくは夫婦という形態自体を否定しているわけではない。寧ろそれは男女双方にとって必要なものである、という認識を示して

もいる。次に引用するのは、『婦人公論』大正十二〔一九二三〕年四月号の特集「私が女に生れたら？ どう男を遇するか?」というアンケートに対する芥川の回答(として載せられたもの)である。

出来るだけ温良貞淑を装ひ、出来るだけ都合の好い夫を捉へ、出来るだけ巧みに夫を操り、出来るだけ自己を成長させます。所謂経済的独立などは少しも得たいとは思ひません。そんなものは得たところが、反つて少しも余力を持たない奴隷生涯に入ることですから。

先に書翰①に見たように、芥川が「家庭的」女性(夫人)像を理想として掲げている点は変わりがない。ここでは更に、そうしたあり方が女性側にとっても利益もしくは便宜である、という見方が示されている。

ここまで、十分な論証は抜きに、芥川のエッセイ等に出てくる彼の女性観・結婚観を示すものから随意に抜き出しただけであるが、少なくともそれらを見る限り、彼の認識は同時代は勿論、ヘタをすると今日にまでこの社会に根強く尾を引いている一般大衆にありがちなジェンダー観=異性や結婚制度に対する態度と根本的には変わらないものであって、芥川のように現実の諸相を深く洞察する眼を持ち、しかもそれを日本型自然主義者のように素材のまま放り出して作品として提示するのではなく、自己の理智的認識のフィルターを通して創作という架空世界に高度に再形象化して示すことの出来た稀有の作家(やや過褒かもしれないが、とりあえず私はそのように把握・評価している)芥川龍之介にあっても——あるいはそんな彼だからこそ、かもしれないが——近代日本の家庭・性差を巡る同時代社会的認識の枠内に留まるような発話を重ねていることは大変残念に思う。

尤も、それを批判することは容易だが、攻撃のための攻撃は何も産むところがない。甘い認識やダメ発言、あるいはそのような表象をどう読み解き、未来を含めた現実世界の人々の意識変革に繋げるのか。その部分は文学を読み、それを批評する我々——この語が含意するところは単に研究者のみでなく、この文章を読んでくれている方々、ひいては学生や一般文学読者までも想定する——つまり今日を生きる総ての人々の認識と態度にかかっているものと思う。なぜなら、あるいは従って、文学は(同)時代の現実を映す鏡であるのだから。